

## 町工場の世界：小関智弘の町工場巡礼記の研究

萩原, 進 / HAGIWARA, Susumu

---

(出版者 / Publisher)

法政大学経済学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

The Hosei University Economic Review / 経済志林

(巻 / Volume)

69

(号 / Number)

4

(開始ページ / Start Page)

303

(終了ページ / End Page)

321

(発行年 / Year)

2002-03-28

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00002973>

# 町工場の世界：小関智弘の町工場巡礼記の研究

萩原 進

## 目次

はじめに

第一章 労働倫理学の必要性

第一節 労働経済学における労働観の一面性

第二節 仕事と家族：浅田次郎作『鉄道員（ぼっぼや）』のメッセージ  
(以上 本号)

第三節 ルター神学における〈職業〉と〈救済〉

第二章 小関智弘の町工場巡礼記の研究——その（1）

第一節 町工場に働く人々

第二節 機械工のキャリア

第三章 小関智弘の町工場巡礼記の研究——その（2）

第一節 旋盤工の仕事

第二節 ME 革命と旋盤工

第三節 小関智弘の熟練論

むすび

## はじめに

法政大学の経済学部で教鞭を取り始めて、かれこれ三〇年近い歳月が過ぎて行きました。助教授に就任した1971年度からずっと、労働経済論の講義と経済学演習（ゼミナール）を担当してきましたが、演習の方も始めの十年ほどは、専攻分野である労働経済論と労使関係論に沿ってテーマを設定し、講義のシラバスに近いレアー・プランを立てておりました。ゼミの

教科書として、兵藤釗さんの『日本における労資関係の展開』、ウェッブ夫妻の『産業民主制論』（邦訳）、ベルトン・フライシャーの『労働経済学』（英語版）などを用いていたように記憶していますが、今から振り返って見ると、学部レベルの教科書としては少々難し過ぎた気がしないでもありません。その頃労使関係学界において、労働調査を重視する風潮が強かったせいもあって、わがゼミでも毎年工場見学や調査を行っておりました。明治五年に官営工場としてスタートした群馬県富岡の富岡製糸工場（見学当時は片倉製糸が経営）、オリンパスの諏訪工場（カメラ製造工場）、東京都中央卸売市場の芝浦屠場と築地市場など、数多くの工場や事業所をゼミ生とともに訪れました。当時の工場見学については、今でも忘れ難いなつかしい思い出として記憶に残っています。

しかしいろいろ考える所があって、1981年度から経済学演習の内容を、労働経済学から経済学の基礎理論にガラリと変更してしまいました。学部の学生に対して、大学院レベルのあまりにも専門的な教育を行うのはいささか非教育的ではないかと、私自身が反省したことが変更の主たる理由です。その後は、P・サムエルソン『経済学』、ドーンブッシュ&フィッシャー『マクロ経済学』、西村和男『入門ミクロ経済学』などの近代経済学の代表的な教科書を用いた中級の経済理論の教育と、『日本経済新聞』の読み方の訓練などに専念してきました。こうした授業方針の変更が功を奏したためでしょうか、ゼミ生たちの就職や公務員試験での合格率が飛躍的に良くなり、うわさによると、萩原ゼミも経済学部の名門ゼミの一つに仲間入りしたそうなのであります。どこの大学でも、学生の就職が良いゼミや、テレビに出演することが多いタレント教授が担当しているゼミに、自然に学生たちの人気が集まります。そして人気の高いゼミは、いつの間にか名門ゼミと呼ばれるようになるのだそうです。学生のこうした就職重視の風潮に強く反発して、アカデミズムの旗を絶対に降ろそうとはしない頑固な愛すべき先生方が、大変少数ではありますが現在でも残っておられないわけではありませんが。中級の経済理論の学習を中心にしたゼミの基調

は、1981年度以来今日に至るまで変わってはおりませんが、1995年頃からそれまで中断していた工場見学と労働調査を再開し、以後ゼミのいわば課外活動として工場などの社会見学を重視してまいりました。ゼミ生たちを連れて年に2～3回様々な職場を訪問し、〈人々が実際に働いている姿〉＝〈労働の現場〉を学生たちに見せ、私も学生たちと一緒に現場を実地に見聞する、というプログラムがそれです。今では工場見学は、ゼミの様々な活動の中でもっとも楽しく有意義なプログラムになっており、教室での正規のゼミよりもゼミ生たちには好評のようにさえ見受けられます。特に、工場見学の下見や資料づくりの作業はとて面白く且つ有益であり、調査終了直後に現地で行う懇親会も実に楽しいひと時となりました。集団によるフィールド・ワークの醍醐味を感じさせる一瞬といっても過言ではありません。

工場見学は、春秋に一回づつ行うことを原則にしてきました。2001年度においては、春には、蒲田の金属・機械関係の〈町工場〉の見学と、大田区産業振興協会が地域と中小企業の振興のために行ってきたもろもろの活動の調査を行い、秋には、東京都中央卸売市場・築地市場に出向いて早朝の五時半に始まるマグロのセリを見学し、魚と青果の流通過程の調査を行いました。調査の立案と準備は、すべてゼミ生の手で行われ、私はあくまでも助言者に過ぎません。七月下旬に行われた大田区蒲田の見学会の際に、呑川（のみがわ）沿いや六郷（ろくごう）界隈の町工場を学生たちと見て歩いていた時のことです。私は突然えたいの知れない不安感に襲われて、意気消沈して考え込んでしまったことがありました。

蒲田の呑川沿いの工場や六郷界隈の町工場には、週末でもないのにシャッターを閉め切って休んでいる工場が目立ち、廃墟のようなさびれた風情をさえ呈しているのです。へたくそな字で〈工場売ります〉とか、〈貸工場〉と書かれた薄汚れた紙切れが、ベタベタとシャッターに貼ってある工場も少なくありませんでした。日本の機械工業を下から支え続けてきた大田区の〈町工場〉群に、何か不吉なことが起こっているのではあるまい

か、私はそんな不安な感じに襲われて、一瞬気がめいってしまったのだと思います。もしかすると、最近しきりにささやかれている〈製造業の空洞化〉と言われる現象が、日本の製造業の中枢にまで及んできていて、大森・蒲田の〈町工場〉群さえも空洞化の波に洗われて消滅に向かおうとしているのではあるまいか。もしそれが事実であるとすれば、これまで工業製品の輸出で生きてきた加工貿易型の日本経済の繁栄も、日ならずして終わってしまうのではないか。といったような不吉な予感や深刻な疑問が、次々と脳裏をよぎって行ったのです。

工場見学を終えるとすぐに私は、金属機械工業の集積地としての大田区に関する研究書や報告書類を、手あたり次第に読みあさる事にしました。その中で、空洞化の問題に真正面から取り組んでいる関満博さんの諸著作は、啓発される所が非常に多く、中小企業論を一から教えていただいたような気がいたしました。特に、大田区の町工場を詳細に調べあげた、関満博・加藤秀雄著『現代日本の中小機械工業』（1990年）からは強烈な刺激を受けたと言ってよいでしょう。そんな風は大森・蒲田の町工場に関する様々な書物を読みあさっているうちに、偶然にも私は、ダイヤモンドか金の鉱山を掘り当てたような幸運にめぐり合うことができました。小関智弘さんの『大森界限職人往来』（1981年）というすばらしい本にめぐり合うことができたからです。

小関さんの名前は、蒲田の町工場を扱ったNHKのテレビ番組などで存じあげてはいましたが、著書を丁寧に読んだのはこの時が始めてでした。小関さんはなかなかの文章家ですから、なんの変哲もない町工場の世界を描いても、それを面白い読み物にしてしまう特技とも言える技を持っておられます。ですから私は面白くてたまらずに、『大森界限職人往来』に続いて小関さんが書かれた数々の町工場巡礼記を、片端から読んでしまったのです。市販されている小関さんの書物は全て購入し、絶版の本は古書店で買い求めました。図書館から借り出して、わざわざコピーを撮ったものもあります。10数冊にも及ぶ町工場巡礼記を一通り読み終えて、言いよう

のない感慨（感動といった方が良いかもしれない）が胸に迫ってきました。小関さんの著書は、単なる面白いノン・フィクションの読み物ではない、小関さんの著作のすべて、小説や座談会の記録や講演をも含めて、小関さんのすべての著作は、自己の体験と見聞をもとにして書かれた〈戦後日本労働史の貴重なドキュメント〉であり、〈戦後日本労働史の資料館（アーカイブ）〉そのものと言ってもよいのではないか、と思えたのです。私は久しぶりに胸の高ぶりを感じて、まず、小関さんが残して下さった膨大な記録の目録と索引を作っておこうと決意した次第です。

ジョン・リードと言うアメリカの左翼ジャーナリストは、1917年11月にロシア革命を目撃して、『世界を震撼させた10日間』と題するルポルタージュをペトログラードから世界に向けて書き送りました。このルポルタージュは、ロシア革命を描いた貴重なドキュメントとして高い評価を受け、今日では、ロシア革命史研究の重要資料と目されています。『世界を震撼させた10日間』のような〈体験にもとづいて書かれたルポルタージュ〉には、資料価値の高い優れた作品が多いと言えるのですが、逆に、体験記であればそれだけで資料価値の高い良い作品になりうるとは必ずしも言えません。ジャーナリストや研究者の手になる、実際に工場で働いた体験をもとにして書かれた労働生活の記録は、労働研究の分野には意外とたくさん存在します。実際の体験をデータとして用いる研究方法は、社会調査論では参与観察法と呼ばれていて、社会調査法としては最も高い評価が与えられているのですが、参与観察法にもとづく研究といえどもピンからキリまであって、すべてが良質の作品であるとは言えません。中にはホワイトの『ストリート・コーナー・ササエティー』のような、不朽の名作と言われる作品も確かに存在しますが、しかし後世に残る資料価値の高い作品となると非常に少ないと言わざるを得ません。労働者がみずからの労働生活を描くのと、インテリがなじみのない労働者の仕事の世界を研究者として描くのとでは、対象である労働生活に関する知識の量に雲泥の差がありますので、出来上がり具合がまったくちがってしまうのも当然です。ですから、

旋盤工歴四十年以上の小関さんが、旋盤工としての豊富な体験をもとにして書いた数々の町工場巡礼記は、まことに貴重なドキュメントなのであり、中小企業や労働市場の研究に従事している研究者たちにとって、文字通り宝の山の資料館なのであると私は確信しています。

なにせ宝の山ですから、そこには色々な宝石がたくさん埋蔵されています。例えば、工作機械の技術史に関心のある研究者が、自分で使う刃物（バイト）を旋盤工が自分で造り、そうした作業を〈火造り〉（ひづくり）と旋盤工たちは呼んでいて、自分が〈火造った〉刃物を道具箱に入れて大事に持ち歩いていたこと、そのような〈火造り〉の習慣が、戦後いつ頃まで続きいつ頃に消えていったのか、もしそういう事が知りたいのであれば、小関さんが我々に残してくれた宝の山の資料館に分け入れればよいのです。知りたい情報は、宝の山の資料館ですぐにでも見つけ出すことができますでしょう。

労働者が営む工場での生活の世界を社会科学的に描こうとする場合、もっとも描きにくくしかも分析のメスが入れにくい領域は、労働者が熟練を形成していく過程ならびに労働者が身につけた熟練の中味（＝熟練の質）だと言えます。賃金や労働時間に関しては、厚生労働省によるしっかりした信頼できる統計調査があり、消費生活や住宅に関してもかなり良い統計が存在します。しかし、教育や訓練への投資の額であるとか、人的投資による生産性の上昇効果などのデータになりますと、まさにお手上げといってよいほどで、全く存在しないと言ってよいかもしれません。熟練の形成過程や熟練の中味の分析は労働経済学のきわめて重要な課題なのですが、困った事に良質のデータがないために、研究はほとんど進んでおりません。周知のように、法政大学経営学部教授であった小池和男さんは、この分野で、アメリカ人のG・ベッカーやJ・ミンサーと共にパイオニアの役割を果たされました。（小池さんは、現在も現役でバリバリと仕事をされておられますので、過去形で表現するのは不適切でしょうが）。小池さんは、主として〈聞き取り調査〉（＝社会調査論では、インタビュー・メソッド

〔面接調査法〕とされています)の方法を駆使して、〈熟練技能の形成過程〉を実証的に解明するという非常に困難な課題に挑戦してこられました。そして本当に実り豊かな成果を生み出し、日本の労働経済学の水準を飛躍的に高めるといふ偉大な貢献をされたのです。

機械工業においては、標準化と機械化が極端に進んでしまっている〈量産工場〉と、依然として熟練工の名人芸に依存せざるをえない多品種少量生産の〈町工場〉が併存していて、その〈労働の世界〉は万華鏡のような複雑な姿をしています。機械工と一口で言っても様々な職種があって、いずれも熟練職種なのですが、代表的な職種は旋盤工だと言って間違いないと思います。旋盤(英語でlatheと言う)を用いて鉄などを加工し、例えば螺子(ねじ)などを造るのが旋盤工の仕事の内容なのですが、100分の1ミリ未満の誤差しか許されない精密加工の世界ですので、仕事に熟達するには長い経験と現場での訓練(OJT)を必要とします。つまり旋盤工は、機械工のなかの代表的な熟練職種であり、熟練クラフトに他なりません。小関智弘さんは高校を卒業してすぐに、旋盤工のキャリアをめざして旋盤工見習いになり、やがて旋盤工になられた方ですから、処女作の『大森界限職人往来』は言わば〈旋盤工〉の〈Bildungsroman〉だとも言えるのです。

旋盤工は、戦後巨大な技術革新の波に洗われます。1960年代に入って、それまでの工作機械とは全く異なる、人間に代ってコンピュータが工作機械を操作する〈数値制御工作機械〉(NC工作機械)なるものが登場するに至ったのです。NC工作機械はその後、〈マシニング・センター〉に高度化され、今日では、設計から製造までを一台のパソコンで操作できるほどに技術が進んできています。こうした情報革命の影響は、旋盤工の仕事の世界を一変してしまいました。旋盤工の仕事は、どのように変化していったのでしょうか。1970年代後半から1980年代の前半にかけて、機械の操作や生産工程におけるコンピュータの利用はマイクロエレクトロニクス(ME)革命と呼ばれて、様々な論争的になりました。ME革命によって機



械工の熟練は無用化すると言う〈熟練解体論〉または〈熟練無用化論〉が盛んに主張され、産業用のロボットによる自動車製造工場の完全無人工場化論と言った極論まで登場いたしました。他方、小池和男さんの〈知的熟練論〉のような熟練の変容論も、提起されました。一体全体、どちらの主張の方が正しかったのでしょうか。〈熟練解体論〉と〈熟練変容論〉のどちらが、事態の変化を適切に把握していたのでしょうか。小関智弘さんは、親企業の日本特殊鋼の倒産によって職を失い、しばらく失業保険で暮しますが、この時にNC工作機械の講座を履修して、新技術をマスターします。小関さんは、身をもって体験したME革命を、どのように見ているのでしょうか。ME革命の仕事と熟練への影響に関する本当に貴重なドキュメントを、小関さんは残してくれたのです。

この論文の目的は、小関智弘さんの町工場巡礼記の研究に置かれています。ねらいとする所は、1951年以来旋盤工の仕事をずっと長年にわたってやってこられた小関さんの町工場巡礼記を素材にして、日本の製造業労働者（ブルーカラー職種）の熟練技能の形成の仕方や熟練の中味を考えて見ることにあります。私は、旋盤工としては全くの新米に過ぎないのですが、小関さんの町工場巡礼記という紙の素材に、旋盤で加工を加えたり熱処理をしたりして、面白い製品を作ってみたいものだと思っているのです。小池和男さんがこれまで、聞き取り調査法を武器にして行ってきた〈日本の労働者のキャリア研究〉の流れに、ちょっと変わったやり方ではありますが、竿をさしてみようというわけです。大田区の金属機械工業の未来についても、深い関心を持ってはいるのですが、この論文の課題はあくまでも、小関さんの町工場巡礼記の研究を通じて〈日本のブルーカラー労働者のキャリア形成〉について考えることに限定されます。〈もの造り立国〉としての日本の今後について、あるいはナショナル・テクノポリスとしての大田区の未来については、また別の機会に論じてみたいと思っています。

これから、旋盤工を中心にした機械工の熟練形成過程と熟練の中味（あ

るいは熟練の変容)を、小関さんの町工場巡礼記を素材にして調べていくわけですが、本論に入る前にまず、熟練(形成)とキャリアについてやや哲学的な議論をしておく事にいたします。私のような哲学の門外漢が、哲学的な議論に挑むのはまことに危険なことであり、そのことは十分に自覚してはいるのですが、職業労働の世界の探求は、経済学の枠にはとどうてい納まりきれませんし、職業倫理や労働倫理の問題と深くからみ合っている以上、哲学的な議論を避けて通ることはできません。

## 第一章 労働倫理学の必要性

### 第一節 労働経済学における労働観の一面性

大学や高校の先生たちは、最終学年にいる教え子たちの就職のことで、毎年苦勞が絶えないのが普通です。特に景気が悪い時には、企業から内定をもらえずに留年を余儀なくされる学生が続出しますし、公務員試験に落ちてしまってガックリ気落ちしている学生が増えたりして、教師の方も特段に気を使わざるをえません。社会人としての第一歩を踏み出そうとしているいわば門出の時期にある若者が、定職を得ることができないために、しょっぱなから人生につまずいてしまって挫折感と絶望感にさいなまれているのを見るのは、本当につらく悲しいことです。このように職業的生涯の初発につまずきを経験してしまった学生を励まして、根気強く就職活動を継続させるには、教師の側に相当の説得力と指導力がなければなりません。人を癒したり励ましたりする仕事は、非常にやりがいのある事ではありますが大変に難しい仕事であって、求めて教育職に就いた者だからと言っても誰にでもできる事ではありません。

就職に関してゼミナリストンからよく相談を受けますが、私にとってもっとも答えにくい難問は、女子学生から受ける〈女性は仕事と家庭のどちらを選ぶべきでしょうか〉といったような女性の職業選択に係わる質問で

す。女子学生からこの種の質問を受けるたびに、返答に窮して困惑してしまいます。結婚をして家族を形成することは、男性にとっても女性にとっても重要なことでありますから、ほとんど選択の余地のない問題であると言ってもよいかと思われます。また男性にとっては、就職するか否かは、結婚と同様に選択の問題にはなりません。〔職業Aと職業Bのいずれを選択するかと言う選択問題は勿論存在しますが。〕職業に就いて収入を得なくては、家計を支えることもとよりのこと、自分自身が生きていくことさえもできないからです。ところが女性は、家計を維持していくために必要な収入を夫が稼働できるのであれば、職業労働に就かねばならない〈経済的な必要性〉は、存在しないことになります。しかも女性にとって、職業生活と家庭生活は基本的にトレード・オフの関係にあって、二つを両立させる事は非常な難事なのです。妊娠・分娩・育児（授乳）は女性以外にはできませんし、この間女性は仕事を離れなければなりません。ですから夫婦共働きで三人の子を産んで育てるには、超人的なエネルギーを必要としますので、普通の人にはまず不可能なことと思われます。〈夫が畑を耕し（農作業を行い）妻が布を織る（家事を行う）〉と言った伝統的な性別役割分業こそが、人類社会の自然な常態であるとみなす考えには、しっかりした根拠があると言ってよいでしょう。性別役割分業を重視する立場に立てば、〈女性は仕事と家庭のどちらを選ぶべきでしょうか〉と言う問に対する答は、おのずと〈家庭を選ぶべきです〉と言うことにならざるをえません。

職業というものが、収入を得るための単なる手段にすぎないのであれば、〈女性は仕事と家庭のどちらを選ぶべきでしょうか〉と言う問に対する答は非常に簡単で、〈ご主人の収入が高いのであれば、あえて主婦が外に出て働く必要はないでしょう〉と言うことに尽きると言って良いでしょう。しかし職業と言うものに、もしも経済的価値とは次元を異にする倫理的価値と言ったものがあるとすると、問題は深刻です。男性は職業生活を通じて、経済的価値と共に倫理的価値をも手にすることができるのに対し

て、職業に就かない女性は、経済的価値だけでなく倫理的価値をも手にすることができずに、家庭生活だけで人生を終えてしまうことにならざるをえないからです。職業労働は、所得を稼ぎ出すための単なる〈手段〉にすぎないのでしょうか。それとも職業には、手段的な価値以外に目的価値とも言うべき〈倫理的価値〉があると言えるのでしょうか。

仕事や職業労働に関する学問的な探求は、これまで主に経済学によって担われてきました。経済学における〈職業労働〉に関する伝統的な概念は、非常に簡単にして明瞭なものであって、古典経済学から現代経済学に至るまで全く変わっておりません。経済学では職業労働を、やむを得ず行わざるをえない〈労苦〉（＝つらい仕事）と捉えてきました。労苦に相当する英語は、レイバー（＝labor）または Toil（＝toil）ですが、企業が人手（レイバラー）を雇って働かせる場合、その人手に必ず〈労苦〉（レイバー）を強いることとなりますので、労苦を強いる以上、企業は人手に対して代償を支払わねばなりません。労苦の代償は〈賃金〉（＝ウェイジ）と呼ばれてきましたが、企業は人手を使う以上、労苦に報いるための報酬として賃金を人手に与えねばならないわけです。このように、経済学における生産要素としての〈労働〉（＝職業労働）は、〈賃金〉と言う貨幣的報酬を得るためにやむを得ず行う〈労苦〉意外の何物でもない物と見なされているのです。

He toils and moils for money.

（彼は、生活のために、あくせくと働かねばなりません。）

これが、経済学の世界に出てくる〈職業労働〉または〈仕事〉に関する基本的な観念なのです。経済学の労働観を端的に要約するとすれば、労働とは本質的に、〈きつい〉、〈きたない〉、〈きけん〉なものであり、要するに 3 K なのであり且つ Toil・And・Trouble なのである、と言うこととなります。労働や仕事は、〈賃金〉を稼ぐために行う〈労苦〉以外の何物でもないのです。

経済学のこのような労働観は、100%間違いであるとまでは断言できませんが、極めて一面的でしかも非常に偏頗な労働観であると言っても言い過ぎではないでしょう。経済学の世界にだけ登場するこうした極端に一面的な労働観の限界は、人々の日常生活のいたるところに見ることができません。一例を挙げておきましょう。年度末の三月になると、定年退職で職場を去って行く人たちをねぎらうための退職記念パーティーが開かれます。退職記念パーティーで、うきうきと楽しげに退職していく人の姿を見ることはできるでしょうか。退職していく人々は皆一様に、長年勤めた職場を去り難いがために、名残を惜しみつつ寂しげに退職して行くのが普通です。定年退職者の多くは、退職後の〈毎日が日曜日〉になってしまう生活に、やりきれない虚しさを感じて始めから落ち込んでしまってさえているのです。〈仕事〉と言うものが、単に生活の資を稼ぐためにやむを得ず行う〈苦役〉に過ぎないのであれば、そうした〈苦役〉からやっと解放されて、年金で生活できる日がやってきたのですから、皆うきうきと楽しげに職場を去っていくはずですが、しかし、実際はそんな事はありません。とすると何故人々は、寂しげに名残惜しげに退職して行くのでしょうか。この事態を的確に解明するには、ひとまず経済学から離れなければなりません。職業や仕事が、所得を得るための手段であることは事実なのですが、ただ単に手段であるばかりでなく、職業と仕事はそれ自身が目的である〈あるもの〉(X)なのです。ですから職業生活からの引退(リタイアメント)は、その〈あるもの〉(X)からの永遠の別れ、ないしは〈あるもの〉(X)の喪失に他なりません。〈あるもの〉(X)が何物であるかは、後に詳しく検討することにして、今はただ、〈あるもの〉とは〈愛するわが子〉のようないとしい物としておくことにしましょう。定年退職は、愛する我が子と死別するのに等しいことであるが故に、それは悲しく寂しく迎えるしかないものなのです。

## 第二節 仕事と家族：浅田次郎作『鉄道員(ぼっぼや)』のメッセージ

作家の浅田次郎は1997年に、八編の短編小説からなる処女作品集『鉄道員(ぼっぼや)』を発表して、小説好きの読者たちの注目を集めたばかりでなく、同年に第117回直木賞を授賞して、作家としては華々し過ぎるほどのデビューを成し遂げました。この作品集に収められた短編小説のいくつかは、直ちに映画化またはTVドラマ化され、いずれもヒットして興行的にも大成功であったと言われています。とりわけ、作品集の表題になっている小説『鉄道員(ぼっぼや)』の映画化は、主人公の佐藤乙松を演じた高倉健の人気もあって大ヒットになっただけでなく、1999年度の日本アカデミー賞の各賞を総なめにしてしまいました。

小説にせよ映画にせよ『鉄道員(ぼっぼや)』が、かくも多くの人々の関心と呼び、感動させることができたのは一体何故なのでしょう。まずは、物語の荒筋から見ていく事に致しましょう。

『鉄道員(ぼっぼや)』は、北の雪国である北海道の美しい自然を背景にして、佐藤乙松という国鉄機関士の人生を、“ぼっぼや”としての仕事や家族との生活の哀楽を通して描き出した、一種のファンタジー文学だと言って良いと思います。国鉄機関士の子として生まれた佐藤乙松は、小学生のころから機関士であった父親から“ぼっぼや”魂を吹き込まれながら育てられ、将来自分も父親のような“ぼっぼや”になることを夢見ている根っからの鉄道少年でした。北海道でも有数の炭鉱町であった幌舞に生まれ育った乙松は、戦後日本の経済復興の主役であった石炭産業の全盛期に中学校を卒業します。敗戦国日本の〈経済復興の牽引車になって働け〉と父親から強く督励されたこともあって、乙松は高校には進学せず、卒業とともに国鉄北海道支社に“ぼっぼや”(機関士)職をめざして志願致します。希望通りに国鉄北海道支社に採用された乙松は、蒸気機関車の釜炊き(機関助手)からスタートして機関士(ロコモティブ・エンジニア)のキャリアを一步一步と歩み続けるのでした。乙松は、やがて機関助手から機関

士に昇進して、少年時代から抱き続けた〈父親のような“ぼっぼや”になりたい〉という夢を遂に実現したのでした。

炭鉱町の幌舞（ほろまい）と都会の美寄（びよろ）を結ぶ幌舞線は、「二十一・六キロの沿線に六つの駅を持つ」ローカル線に過ぎませんでした。乙松が機関士であった頃の幌舞線は、幌舞炭鉱から採掘される大量の石炭を昼夜兼行で輸送するドル箱線だったのです。乙松は、同じく幌舞出身で一年後輩の親友仙次と一緒に、デコイチと呼ばれる蒸気機関車（D51）を運転していたことがあります。機関区で働く人々は、機関士としての仲間意識が極めて強く、〈機関庫共同体〉と言われる凝集性の高い社会を形成していると言われていました。乙松は、頑固なまでに一徹な仕事人間である上に、機関士仲間の面倒をよく見る男であったこともあって、美寄機関区の仲間からことのほか尊敬され慕われてもいました。なかでも仙次と乙松は、クルーを組んでいたこともあって、兄弟のような親しい間柄でした。頑固なまでに仕事一徹の乙松が、静枝と言う女性と結婚するまでの人生は、ほぼ順風満帆といってよく、暗い影は微塵も見られません。仙次も乙松も、“ぼっぼや”の中ではエリート職種と言われる機関士に希望通りになれた上に、結婚も順調にいて、何もかもうまくいくように思われました。ところが乙松の人生の歯車は、結婚以後徐々に狂いだし、次々と不幸せことが続くのでした。読者は、小説のこの辺りを読み進むのに苦痛を感じざるを得ないでしょう。

まず乙松と静枝は、子宝に恵まれませんでした。乙松は、妻の静枝に男の子を産んでもらって、その男の子が機関士になれるように育てるのが希望であり夢でありました。“ぼっぼや”三代の夢が、乙松の日頃の口癖でした。しかし乙松夫妻は、結婚して十五年たっても、子供には恵まれませんでした。高齢出産には、妊婦の生命にもかかわる危険性が伴いがちなのですが、三十歳代後半になっても静枝は諦めずに、不規則な鉄道勤務のためにまともな夫婦生活にも事欠く境遇にめげず、乙松との夫婦生活を続けます。そして乙松が四三歳、静枝が三十八歳になってようやく子宝に恵ま

れたのですが、生まれてきた子は女の子でした。子供は、十一月十日の北海道に初雪が降った日に生まれましたので、雪子と命名されました。男の子ではありませんでしたが、乙松にとっては、四三歳になってようやく得られた子宝ですから、それこそ眼の中に入れても痛く感じないほどかわいく感じられたのです。

しかし雪子は、一歳の誕生日を迎えることなく、風邪をこじらせて肺炎で急死してしまいました。親の不注意で雪子を肺炎で死なせてしまったことは、乙松にとっては、死ぬまで消えることのない負い目になり、痛恨の極みの故か、町で少女の姿を見ると胸に痛みを感じてしまうほどでした。夫婦の間に、なんとなく隙間風が吹くようになったのも、あまりにもあっけなく死んでしまった雪子に対する悔恨の念によるものと思われる。

「十七年前の吹雪の朝に、女房の腕に抱かれてユッコをあの家から送り出した。いつに変わらず指差喚呼して、気動車を見送った。そしてその晩の気動車で、ユッコは同じ毛布にくるまれて、ひゃっこくになって帰って来たのだった。

(あんた、死んだ子供まで旗振って迎えるんかい)

雪の家でうずくまって、妻はユッコをかき抱きながらそう言った。

(したって、俺はポッポヤだから、どうすることもできんしよ。俺がホームで旗振らねば、こんなもふぶいているなか誰がキハを誘導するの。転轍機も回さねばならんし、子供らも学校おえて、みんな帰ってくるべや)

妻は言い返した。

(あんたの子も帰ってきたべき。こんななって。ユッコが雪みたいひゃっこくになって帰ってきたべき)

妻が乙松に向かって声を荒らげたのは、後にも先にもその一度きりだった。」

乙松は、定年退職の二年前に妻の静枝を亡くし、天涯孤独の寂しい老後を迎えることになりました。他方友人の仙次のほうは、長男が北海道大学を卒業してJR北海道にキャリア組で入社し、初孫にも恵まれて幸福な老



後を保証されたような境遇にありました。途中まではよく似ていた二人の人生行路は、どこかで明と暗に分岐してしまったのです。家族に恵まれなかった乙松に、さらに残酷な仕打ちが待っていました。乙松の定年を待たずに幌舞線の廃線が決まってしまう、機関士から幌舞駅長に栄転して以来長年にわたって妻の静枝と生活を共にし管理してきた駅舎も、廃線と同時に解体されてしまうと言うのです。仙次の方は美寄中央駅の駅長であり、乙松より約半年遅れて定年退職することになってはいるのですが、定年退職後は美寄中央駅にできる駅ビルデパートの重役のポストが用意されていて、退職後の処遇についても万事が順調に整えられていたのです。仙次と乙松は、ほぼ同じような“ぼっぼや”のキャリアを歩んできたわけですが、両人がたどった人生は全く違ったものになってしまい、皮肉なことに、仙次よりも実直で仕事一筋であった乙松の方が、かえって恵まれない人生を送らざるをえなかったのです。

乙松は、炭鉱の町に生まれ育ち、国鉄の機関士としてのキャリアを歩んで“ぼっぼや”人生を送りました。しかしまもなく炭鉱は閉山になり、さびれたローカル線の幌舞線も遂に廃線になることが決まってしまったのです。家族を失った乙松は、生涯の仕事と思って打ち込んできた“ぼっぼや”の仕事をも失ってしまったわけですから、言ってみれば自分が精魂を込めてやってきた全てのことが、ことごとく“無”に帰してしまったとも言えるのです。乙松に残されたものといえば、孤独な独居老人としての老後の人生と看取る者もない孤独な死だけです。仙次は、乙松の退職後の一人暮らしを心配して、乙松を美寄に呼び寄せて世話をする気でいたのですが、静枝やユッコとの思い出に満ちた幌舞駅を去ることは、乙松にはできかねることでした。乙松は、定年退職後直ちに美寄に引っ越して、新設の駅ビルデパートに再就職するようという仙次の思いやりのこもった提案をも、キッパリと断ってしまわざるを得なかったのです。

三月末の定年退職を目前にして、幌舞駅長としての最後のお正月を親友の仙次と過ごし、仙次が美寄に帰った日の翌朝、一月三日の早朝のことで

した。前日大雪が降ったためにラッセル車が出され、美寄を出たラッセル車が早朝の幌舞駅に入って来る直前に、乙松は脳梗塞で倒れ、プラットホームの雪の上に手旗を握ったままの姿で死んでいたのです。美しくきれいな最後でした。

前日の一月二日の晩に、十七年前に死んでしまった雪子の妖怪が現れて、父の乙松のために夕食を調理し、二人が親子水入らずで楽しげに団欒しながら夜をすごしていたことを、二日の夜に最終気動車を運転していた機関士が目撃しています。雪子は、二年前に母の静枝も埋葬された佐藤家のお墓に、父の乙松をも連れて行ってしまおうとしていたのです。〈一人娘の雪子を、俺の不注意で風邪を引かして殺してしまった〉と、自分を責め続けてきた父の乙松を、雪子は不憫でしょうがなかったのでしょうか。雪子は、思い切って死神である雪女になって、父を迎えに来たのです。妻の静枝と娘の雪子と三人で暮らすことが、乙松にとっては何事にも代え難い至福の世界であることが、雪子にはよくわかっていました。ですから父の乙松をあのに連れて行ってしまふことが、すべてを失って打ちひしがれている父に救いの手をさしのべることになると思って、雪子は雪女になってお墓から出て来たのです。

この小説は、ラフカディオ・ハーンの『怪談』に出てくる〈雪女〉の昔話を巧みに利用したファンタジー小説なのですが、ファンタジーといった宗教的な道具立てを使って作者が言おうとしていることは、以下のような事だったのではないのでしょうか。

仕事や家族のために真剣に生きた者は、必ず神の恩寵に浴する。

浅田次郎は、作品集『鉄道員（ぼっぼや）』の「あとがきにかえて」において、「私は本来、神仏から授かる御利益や功德を信じない。……しかし、たゆまざる努力や真摯な懊悩のもたらす“奇蹟”は信じていた」と述べています。浅田次郎が小説『鉄道員（ぼっぼや）』で提起している問題は、(1) 仕事と家族は人間の生にとっていかなる意味を持っているので

あろうか、(2) 人間は仕事や家族に対してどのような姿勢で対処しなくてはならないのであろうか、(3) 神の恩寵と救済はどのような生を送った人間に対してなされるのであろうか、といった極めて宗教的な問題群であると言えるでしょう。

私は労働経済学を専攻していますので、『鉄道員 (ぼっぼや)』を読んで直ぐに脳裏を横切ったのは、マックス・ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の第一章の第三節「ルッターの天職観念——研究の課題」において提起されている、有名な職業労働と救済の関連をめぐるマルティン・ルターの神学的議論のことでした。『鉄道員 (ぼっぼや)』の「あとがきにかえて」に述べられている浅田次郎の言葉を読んだ時、思わず「ひょっとすると浅田次郎はプロテスタントなのではないか」と思わざるを得ませんでした。浅田次郎は、勿論キリスト教徒ではありませんが、「真摯な懊悩」は「奇蹟」によって救われると言うその主張は、すぐれてキリスト教的であると言えるでしょう。

『聖書』に出てくる世俗の〈仕事〉というヘブライ語またはギリシャ語の言葉に、〈召命〉(=神に召され神から与えられる使命)という意味を持つベルーフ (Beruf) というドイツ語の訳語を当てたのは、言うまでもなくマルティン・ルターでした。ルターはどうして、聖職以外の普通の職業に対しても〈ベルーフ〉と言う訳語をあてたのでしょうか。次節で詳しく検討することに致しましょう。

(以下次号)

## Labor Writer Tomohiro Koseki and the Machi-kohba's World

Susumu HAGIWARA

### 《Abstract》

Tomohiro Koseki is a well-known labor writer who has been working as a skilled machinist for over forty years in Tokyo. He has published many books in which the life and work of factory workers in small factories at Kamata and Ohmori are described very vividly and in depth. These publications can be regarded as an excellent collection of labor history documents in post-war Japan.

The article attempts to describe the career patterns of skilled factory workers in Tokyo by utilizing Koseki's writings. The setting is a small factory in a town called "machi-kohba". The article focuses upon two specific points: the career-patterns of machi-kohba workers, and the processes by which their skills were acquired. This article is an introductory part of the essay.